令和８年１０月９日

第３学年保護者　様

東庄町立東庄中学校
校長　　土屋　　敦

全国学力・学習状況調査の考察と今後の取組について

秋冷の候、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。また、日頃から本校教育の推進・充実のために、御理解・御協力をいただき厚くお礼申し上げます。

さて、令和８年４月に３年生生徒を対象として行われました全国学力・学習状況調査の考察と今後の取組について配付します。

各家庭におかれましては、考察と今後の取組を踏まえて学習内容の振り返り、家庭学習の習慣化などに活用してください。学校といたしましては、調査の結果を積極的に分析し、職員の指導方法の改善及び生徒の個別指導の充実等、今後の指導に生かしていきたいと考えております。

＜学力における傾向＞

〇国語

「言葉の特徴や使い方に関する事項」は正答率が高く、「情報の扱い方に関する事項」は正答率が低い傾向にあります。領域別では、「読むこと」については、正答率が高い傾向にあります。一方で、「話すこと・聞くこと」「書くこと」については正答率が低くなります。解答形式別では、短答式において正答率が高くなっています。対して、記述式の正答率は低くなっています。基本的な知識や、問いに対して簡潔に答える力はおおむね身に付いていると考えられますが、複数の情報を適切に扱うことや、自分の考えを文章として表現することに課題が見られます。

〇数学

領域別では、「数と式」が最も高い正答率となっています。一方で、「データの活用」「図形」「関数」の正答率は低く、課題があることがわかりました。解答形式別では、選択式や短答式と比べ、記述式で大きく正答率が下がる傾向があります。数学的な考え方や判断の根拠を説明する力に大きな課題が見られます。

〇英語

３技能の中では、「読むこと」が比較的高い正答率となっています。また、「聞くこと」と「読むこと」は、「書くこと」と比較すると正答率が高く、英語を聞いたり読んだりして情報を捉える力には一定の定着が見られると考えられます。「書くこと」は正答率が低く、大きな課題です。解答形式別では、短答式が記述式を上回っており、自分の考えや情報を英語で表現する力に大きな課題が見られます。

＜生徒質問調査の結果＞

〇　本校では「将来の夢や目標を持っている」「教師から自分のよさを認められていると感じている」「困っている人を進んで助けようとする」という点において、肯定的な回答の割合が高かったです。

これらの結果から、生徒が将来に対して前向きな見通しをもち、教師との信頼関係の中で自己のよさを認めながら、他者を思いやり行動しようとする姿が育っていることが、本校の強みとして挙げられます。

○　一方で、ICT を活用した学習活動が課題として挙げられます。特に、「情報を整理する」「プレゼンテーションを作成する」といった ICT を活用した表現・情報活用能力について、肯定的な回答の割合が低くなっています。また、授業における ICT 機器の活用頻度そのものも否定的な割合が高くなっています。今後は、ICT を「使うこと」自体を目的とするのではなく、情報を収集・整理・比較・分析し、自分の考えをまとめて発表するなど、学習過程の中で ICT を効果的に活用する授業づくりを進めてまいります。

＜全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組について＞

○　「書く活動」を増やす

授業の終末に毎時間、「今日分かったこと」「なぜそう考えたのか」「友達の意見を聞いて考えがどう変わったか」２～３文程度で振り返りを書かせています。特に、「私は～と考える。理由は～だからである。」という単純な型から始め、徐々に、「本文・資料の○○から～と考えた。」という根拠を明示する記述へ発展させていきます。

○　「根拠をもって答える」ことを徹底する

例えば、国語の授業で生徒が「主人公は悲しかったと思います。」と答えた場合、教師は「どこからそう考えたの？」と問い返します。その問いに対し、「本文の○○という表現から、悲しかったと考えました。」と答えられるようにします。

これを国語だけでなく、社会 → 資料のどこから？　理科 → 実験結果のどこから？　数学 → 式のどこから？　英語 → 本文のどこから？　と全教科で問い返し、「答え＋根拠」を習慣化していきます。

○　「話す→聞く→整理する→書く」のサイクルを設定する

話合いの内容を捉え、自分の考えを形成する力を伸ばしていきます。授業で、個人で考える→ペア・グループで話す→友達の考えをメモする→共通点・相違点を整理する→自分の考えを書く、という流れを意図的に取り入れます。単に「話し合い活動を増やす」のではなく、話し合った後に必ず個人で書かせるようにしていきます。

その他にも、文章を正確に読み取る力（読解力）の育成を研究の柱の一つとし、校内研修を通して読解指導の視点について共通理解をした上で、教科書の文章構成や設問の意図を捉えさせる指導、根拠を明確にして自分の考えを表現させる指導を各教科で実践します。

＜参考＞

○　この調査は、文部科学省が全国的な状況を把握するために行っているものです。

○　調査対象者は、小学校では６年生、中学校では３年生です。

○　調査は、教科に関する調査【国語、算数・数学、英語（中学校のみ）】と、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査です。